

Title	局面解釈とアスペクト現象 : 生態心理学の観点から
Author(s)	仲本, 康一郎
Citation	日本語・日本文化. 33 P.17-P.36
Issue Date	2007-05
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/6179">https://doi.org/10.18910/6179</a>
DOI	10.18910/6179
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

〈研究論文〉

## 局面解釈とアスペクト現象

——生態心理学の観点から——

仲本 康一郎

### 1. はじめに

形容詞<sup>1)</sup>は、一般に、事物や人物などの属性や状態を表わすとされてきた<sup>2)</sup>。しかし、個々の形容詞の振る舞いを具体的に観察すると、形容詞の解釈はそういった静的な状態ばかりを表わすのではなく、動的な事象の一局面を表わすこともあることに気づく。本稿は、形容詞が事態の変化を背景にして、その未然相や已然相として理解されることを局面解釈と呼び、そのような解釈のプロセスを明らかにする。

第一に、事態の構成を可能にする概念として事象フレームを提案し、局面解釈を説明する道具立てとする。第二に、局面解釈は周囲の環境の持つ意味によっても制約を受ける。本稿は、生態心理学の観点からひとが過去の痕跡や未来の徴候といった情報を積極的に利用することを主張する。第三に、局面解釈は基本的に語用論的な現象であるが、そういった解釈を強制する表現として局面副詞と局面形容詞を位置づける。

### 2. 事態の局面

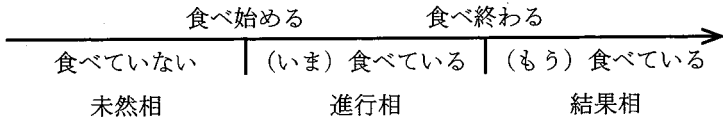
人間は環境のなかの事物や生物の属性を単なる現在の一時的な状態として知覚するのではなく、何らかの行為や出来事のなかの一局面として概念化する。本稿は、このような概念化の方略を“事態の局面”として一般化する。局面 (phase) という概念は、一般に、「より大きな事象のなかに位置づけられた出来事や状態」と定義される<sup>3)</sup>。

これまでに提案された具体的な局面としては、動詞に関する起動相、進行相、終結相や、もっと詳細な変化直後 (*just*) や変化直前 (*almost*) などの局面がある。ただし、これらの局面は基本的に動詞のアスペクトとして提案された概念であり、形容詞の時間的な構成を考えるものではない。本稿は、形容詞の局面として未然相と已然相を基本にした局面を提案する。

## 2.1 事象の分割 (event partition)

語彙意味論の見解によると、動詞が表わす事象はより詳細な出来事と状態の遷移から構成される事象構造として分析される<sup>4)</sup>。例えば、「食べる」という動詞の意味は大きく開始相と終結相という二つの質的な変化点を基準に未然相、進行相、結果相という三つの局面から構成される<sup>5)</sup>。森山の時定項分析<sup>6)</sup>を参考にして図式化すると、このような動詞の局面は(3)のようになる。

- (1) a. ごはんを食べ始める : 起動相  
 b. ごはんを食べ終わる : 終結相
- (2) a. (いま) ごはんを食べている : 進行相  
 b. (もう) ごはんを食べている : 結果相
- (3) 動詞の意味論と事態の分割



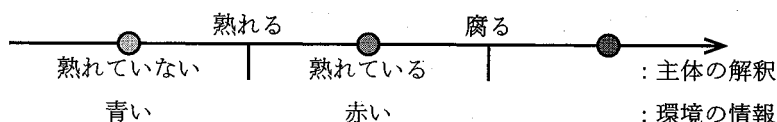
さて、出来事の局面は動詞の派生によって表わされる場合が多いが、形容詞のなかには「はらべこ(だ)」や「まんぷく(だ)」のように「食べる」という出来事の局面として理解される表現もある。このような概念は、単なる完結的な状態として表示されることは不十分であり、「食べる」という出来事との関係のなかで表示される必要がある。

## 2.2 事象の合成 (event integration)

形容詞も同様に、単なる属性や一時的な状態を表わすだけでなく、ある事物や事象が関わる変化の文脈のなかで未然や已然の状態を表わす。例えば、りんごな

どの果実の状態は、「熟する」や「腐る」といった質的な変化点をもとに局面に位置づけられる。植物の場合、「青い」状態は「熟れる」という変化の未然相として、また、「赤い」状態は変化後の已然相として解釈される。

- (4) a. この実は青いよ → 熟していない : 基本的用法  
 b. あいつは青いな → 一人前でない : 比喩的用法<sup>7)</sup>
- (5) a. この実は青い → 未然相 (実が熟れる)  
 b. この実は赤い → 已然相 (実が熟れる)
- (6) 出来事連鎖と形容詞の事態解釈



このように形容詞は単なる一時的状態として理解されるのではなく、ある出来事のなかに位置づけられて局面として解釈される。その際、重要なのは植物の生長(特に、果実の成熟)に関するスクリプト的な知識であり<sup>8)</sup>、われわれはそういった知識に照らして眼前の事態をある変化の一局面として理解することができるといえる。

### 2.3 事象フレーム (event frame)

本稿は、未然相や已然相のような局面の概念を理解する際に何らかの“変化の文脈”が必要となることに注目し、そのような文脈を形容詞が理解される事象フレーム (event frame) として表現する<sup>9)</sup>。例えば、「この実は青い→熟していない」といった局面解釈が成り立つときに働く事象フレームは、「実が熟する」という出来事であるとみなす。

言い換えると、形容詞が表わす状態は特定の事象と相対化されたとき事態の一局面として理解されることになる。以下は、そういった局面解釈を一般化したもので大きく未然相と已然相に分割される。

- (7) 局面解釈: ある状態を出来事の一局面と解釈する認知的操作  
 状態 (x) → 未然相/已然相 (出来事 (x, ...))  
 a. 未然相: 何らかの出来事が起こる前の状態

#### b. 既然相：何らかの出来事が起こった後の状態

さらに、後述するように、未然相を未来の出来事との関連で考えると、出来事への接近の度合いにより近局面と遠局面が、既然相を過去の出来事との関連で考えると、過去の出来事からの距離により始局面と終局面が解釈される。

本稿は、生態心理学の環境観からこのような局面解釈を成り立たせるものは環境のなかにある痕跡や徴候といった生態学的事象であると考え、こういった情報を用いて人がいかに世界を意味づけるかを考える。

### 3. 生態心理学の言語観

言語は外界の直接的反映ではなく、主観に基づく概念化の影響を受ける。しかし、だからといってすべての解釈は主観的であるといった極端な観念論では言語による伝達は説明できない。言語による理解や伝達が可能な理由は、われわれがともに人間として身体を備えた存在であり、そのような身体的な基盤によって経験が共有されるからであろう<sup>10)</sup>。本稿は、こういった言語の身体性の背後に環境の意味論を仮定する。

#### 3.1 生態心理学の言語観

生態心理学の観点に立つならば<sup>11)</sup>、このような身体的な経験はわれわれの身体的な能力のみに帰属されるのではなく、環境がわれわれの身体または身体的な活動と相対的に意味づけられていることにも起因する。このような観点に立つと、言語による概念化も単なる主観的な作用でなく、生態学的な環境の意味に支えられたものとして記述されることになる<sup>12)</sup>。

以下は、生態心理学の代表的な言語観である<sup>13)</sup>。

#### (8) 生態心理学の言語観 (ecological perspective of language)

言語とは、観念あるいは表象の伝達手段ではない。それは情報を他者に利用可能にするための手段であり、それによって自身およびその集団の活動調整に寄与するものである。そのため、言語が何かを指し示すとき、それが指し示しているのは内的表象ではなく環境の状況や状態である。

ここで重要なのは、言語が指示するのは内的な表象ではなく、環境の状態であ

るという点であり、ここではそういった現象のひとつとして生態学的事象として徴候と痕跡を考える。

### 3.2 生態学的実在論——アフォーダンス

生態心理学によると、環境は無秩序な世界でなく、そこに生きる生物にとって豊富に意味づけられている。例えば、石はヒトがそれを投げることを、岩はヒトがそこに坐ることを可能にする。Gibsonはこのような主体にとっての環境の意味や価値をアフォーダンス (affordance) と呼び、われわれの知覚や行為はそうしたアフォーダンスに支えられて可能となると述べている<sup>14)</sup>。

生態心理学の実在論に立つならば、事態の局面といった概念化も単なる観念的な構築物としてでなく、環境によって支えられた概念ということになる。本稿は、局面という概念化を可能にする環境として生態学的事象——特に、徴候と痕跡——の重要性を示し、それらの概念を利用することで、局面解釈は多様性を持つことを指摘する。

### 3.3 生態学的事象——構造化された出来事

生物が暮らす環境は永遠不変のものではなくつねに変化の途上にある。太陽の運行や草木の微かな変化など自然はつねに変化する。また、自然の変化はリズムや周期を持っており、生物は周期的なリズムによって環境の変化に備えることができる。また、生物はこの世に生を受けて成長を続け年老い最後に死を迎える。人工的な事物も破損や故障によりやがて捨てられる。

これらはすべて環境のなかに備わる生態学的事象として人間に与えられている。つまり、われわれの環境はいつどこで何が起こるかわからない不安定な世界でなく、自然の周期的な変化や人間の文化的な慣習や意図的な活動の計画によって構造化されており予測が可能となっている。その他、個人的な約束や切なども時間を構造化する事象として利用可能であろう<sup>15)</sup>。

本稿は、そういった生態学的事象のなかで未来や過去の事態の知覚を可能にする徴候と痕跡という二つの情報に注目する。これは生態学的な事象によって生じた環境の情報であり事象のアフォーダンスの一類型とみなされる。

## (9) 事象のアフォーダンス

- A. 徴候の情報——未来の出来事を予測させる現在の情報
- B. 痕跡の情報——過去の出来事を推測させる現在の情報

## 4. 徴候と痕跡

生態学的事象として利用可能な情報は、基本的に動物や植物の生長、人工物の状態の変化などスクリプト的な知識として記憶される。しかし、なかには、そのような知識以前の段階として、環境のなかの情報がそのまま過去の痕跡や未来の徴候として利用可能な場合もある。本稿は、ひとがこれらの情報をいかに利用し局面を構成するかを見てみよう。

## 4.1 徴候の意味論

## 4.1.1 徴候的信息 (symptom) —— 近局面と遠局面

われわれは現在の状態を将来的に起こる行為や出来事の“徴候”として理解することがある。例えば、曇り空はもうすぐ雨が降るであろうという予期を可能にする徴候として利用される。本稿は、このような未来に関する予期を可能にする情報を徴候的信息と呼び、それらを利用して過去を推測することを予期的認知と呼ぶ<sup>16)</sup>。

行為や出来事の徴候は“緊迫感”と相対的に分節される。つまり、未来の事態するまでにどれだけの時間があるかという観点から局面が構成される。例えば、「(カバンが) ぱんぱんだ」という状態は破裂という出来事の生起に事態が切迫している状態（近局面）を<sup>17)</sup>、これに対して「(カバンが) すかすかだ」は事態が切迫していない状態（遠局面）を表わす。

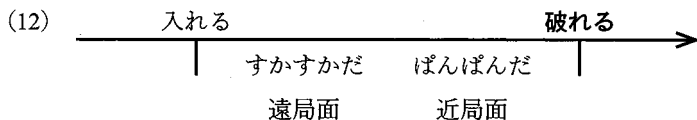
## (10) 事態の近局面 (urgent phase)

- a. このカバンはぱんぱんだ → 危険だ=破れそうだ
- b. このカバンは {もう/?まだ} ぱんぱんだ

## (11) 事態の遠局面

- a. このカバンはすかすかだ → 安全だ
- b. このカバンは {まだ/?もう} すかすかだ

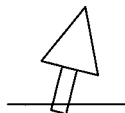
つまり、「ばんばんだ」や「すかさかだ」といった概念は現在のなかに閉じた事態としてでなく、未来に予想される出来事——この場合、「(カバンが) 破れる」——との関連で解釈されており、次のように図式化することができる。これはそれぞれの概念が「破れる」という未来の出来事との関連で意味づけられることを示す。



#### 4.1.2 予期的認知 (prospective cognition)

現在の状態を未来の出来事の徴候として概念化する表現として、日本語の多様なアスペクトやモダリティ表現がある。例えば、次のような状態の木を表わす表現として以下の表現が可能である。これは木が倒れるという危険な状態をわれわれが予期しており、そのような状態になることの徴候が存在するという知覚が反映されている。

- (13) a. 木が倒れよる : アスペクト表現  
 b. 木が倒れそうだ : モダリティ表現



(13a) は西日本方言で動詞の進行形を表わすものであり、出来事が持続的な過程を持たないとき出来事の実現への緊迫を表わす<sup>18)</sup>。また、予期はいまだ存在しない未来の予測であり、本来的に“虚構的”な概念である。したがって、主体の推測を直接的に表わす「そうだ」や「かもしれない」のようなモダリティ表現によっても表わされる<sup>19)</sup>。

その他にも、予期は対象の状態と自己の状態を相関的に表わす「危ない」や「やばい」のような形容詞や、「そろそろ」や「まもなく」のような副詞によっても表わされる。以下は、「この橋」の現在の状態を表わすものではなく、このまま放っておくと危険である(=橋が落ちてしまう)という未来に対する危惧=予期を表わす。

- (14) a. この橋は {そろそろ、まもなく、…} 落ちる  
 b. この橋は {危ない、やばい、まずい、…}

また、これらの表現は未来の状況がどうなるかという予期を表わすだけでなく



(状況への配慮)、その際に主体がどういった状態に陥るか、また、未来に対してどのように対処するかまでも表わすことができる (自己への配慮)。

例えば、形容詞「危ない」の場合、「この橋は危ない」に対して「わたしは危ない」のような表現が可能であるし、さらに副詞「そろそろ」になると、「そろそろ落ちるだろう」のように眼前の事態に対する関心を表わすだけでなく、「そろそろ直したほうがいい」のように眼前の事態を認めたとうえでの対処までも表わすことがある<sup>20)</sup>。

(15)	状況への配慮	自己への配慮
	この橋は危ない	わたしは危ない
	そろそろ落ちるだろう	そろそろ直したほうがいい

## 4.2 痕跡の意味論

### 4.2.1 痕跡的情報 (trace) —— 始局面と終局面

過去の行為や出来事は環境に“痕跡”として証拠を残すこともある。例えば、道路にできた水たまりは雨が降った結果生じる一時的な現象であり、われわれは水たまりによって過去に雨が降ったことを知ることができる。国広はこのように「眼前の状態を過去の行為や出来事の結果とみなす」ことを痕跡的認知と呼んでいる<sup>21)</sup>。

行為や出来事の痕跡は一般に累積的に蓄積される。このような痕跡的情報を利用すると<sup>22)</sup>、既然相は過去の出来事を基準点としてその出来事の成立からどのくらい時間が経っているかという点から解釈される。例えば、「ぴかぴかだ」は対象があまり変化を受けていない状態 (始局面) を、「ぼろぼろだ」は対象がかなり変化を受けている状態 (終局面) を表わす。

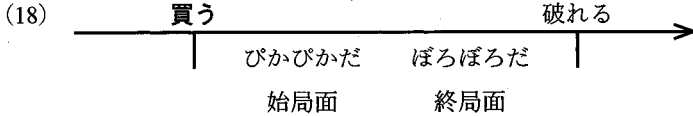
#### (16) 事態の始局面 (initial phase)

- a. このカバンはぴかぴかだ → 新しい=できたばかり<sup>23)</sup>  
 b. このカバンは {まだ / ? もう} ぴかぴかだ

#### (17) 事態の終局面 (final phase)

- a. このカバンはぼろぼろだ → 古い  
 b. このカバンは {もう / ? まだ} ぼろぼろだ

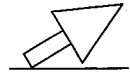
つまり、「びかびかだ」や「ぼろぼろだ」といった概念は現在のなかに閉じた事態としてでなく、過去にあった出来事——この場合、「(カパンを) 買う」——との関連で解釈されており、次のように図式化することができる。これはそれぞれの概念が「買う」またはその後の使用という過去の出来事との関連で意味づけられていることを表わす。



#### 4.2.2 痕跡的認知 (retrospective cognition)

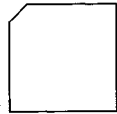
現在の状態を過去の出来事の結果として概念化する表現として、日本語のアスペクト表現がある。例えば、次のような状態の木を表わす表現として次のような表現が可能である。これは木が立っているという理想状態をわれわれが知っており、このような状態になるには何らかの出来事があり、倒れた結果としてそこに存在するという知覚が反映されている<sup>24)</sup>。

- (19) a. 木が倒れている<sup>25)</sup> : 自然の出来事の結果  
 b. 木が倒してある : 意図的な行為の結果  
 Cf. 木が倒されている<sup>26)</sup>



さらに、日本語の「ている」は事物の実質的变化を表わすだけでなく、虚構的に構築された変化の結果を表わす<sup>27)</sup>。例えば、以下の図形は正方形という理想形を基準にそのような図形からの変化の結果として表わされている。(20a)の場合、理想形として正方形を参照点としそこからの変化(かどが取れる)の結果として図形が概念化されている。

- (20) a. かどが取れている  
 b. かどが欠けている  
 c. かどが落ちている etc.



#### 4.3 中絶相の意味論

人間にとって行為はある目標をもって遂行され、目標が到達された状態は理想的な状態を表わす。したがって、行為や出来事とその途中で中絶された場合、そ

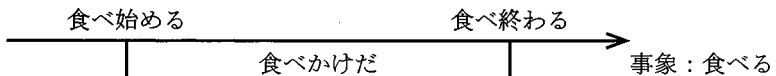
れは注意すべき状態として取り立てられる。最後に、行為や出来事が中断されたことを表わす中断相(「かけだ」と「ままだ」)を取り上げ<sup>28)</sup>、そういった表現が痕跡や予期といった認識を利用した概念化の産物であることを示す。

#### 4.3.1 「-かけだ」の意味論

まず、「-かけだ」という形式は「-かける」という複合動詞の名詞形であり、行為が未遂の状態、つまり、事態が終了する以前の状態にあることを表わす。したがって、「ごはんが食べかけだ」という場合、だれかがごはんを食べ始めたものの、それが途中で中断されており、行為が完結せずにある結果が残っている状態を表わす。

- (21) a. ごはんが食べかけだ  
b. \*坂道が登りかけだ<sup>29)</sup>

(22) 「-かけだ」——痕跡の情報に基づき事象が未完了の状態にある

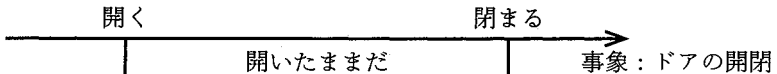


#### 4.3.2 「-ままだ」の意味論

また、「-ままだ」という形式も事態の中断相を表わす。ただし、「-ままだ」はひとつの動詞が表わす事象でなく、その後に期待されるもうひとつの“対事象”が未完了であることを表わす。例えば、「ドアが開いたままだ」という場合、ドアが開いた状態とともに、「ドアが開く」という事象の対事象である「ドアが閉まる」という出来事が未然の状態にあることを表わす<sup>30)</sup>。

- (23) a. ドアが開いたままだ  
b. ドアを開けたままだ

(24) 「-ままだ」——痕跡の情報に基づき場面が未完了の状態にある



このように中断相は基本的に痕跡の情報によって可能となっているが、ごはんは最後まで食べる、また、開けたドアは閉めるといった目標状態が理解されて初めてこういった概念化が成立する。その意味でこれらの表現は、痕跡的認知と予期的認知がともに働くことで可能となる興味深い表現ということができ

るだろう。

## 5. 解釈の強制

局面解釈は基本的にわれわれがその背後にどのような事態を喚起するかという語用論の問題であるが、そういった事態の喚起が強制的に行なわれる解釈の強制という現象もある<sup>31)</sup>。ここでは局面解釈を強制する現象として、局面副詞「もう・まだ」と局面形容詞「古い・新しい」といった概念の意味について考え、事象フレームがどのように適用されるかを観察する。

### 5.1 局面副詞の意味論

局面解釈を誘引する表現として、「もう」や「まだ」のような局面副詞の修飾による解釈の強制という現象がある。局面副詞「もう」と「まだ」は事態を未然相と已然相に分け、ある状態がその二つのうちどちらの局面にあるかを取り立てる。つまり、これらの副詞を付加することにより、現在の状態は何らかの事象の未然相または已然相として解釈される<sup>32)</sup>。

(25) 「もう」と「まだ」による局面解釈の強制

a. 「もう」の局面解釈：状態 (x) → 已然相 (事象 (x, ...))

b. 「まだ」の局面解釈：状態 (x) → 未然相 (事象 (x, ...))

まず、不可逆な事態の場合、事態は一方向に進むために、各々の段階的な状態はどちらかの局面として意味づけられていることが多い。例えば、動植物の成長のような事態の局面は未然と已然のどちらかに位置づけられ<sup>33)</sup>、「生きている」は未然相、「死んでいる」は已然相として解釈される。この反対の解釈は「復活」というフレームを喚起しないかぎり困難である。

(26) a. この魚は {まだ/?もう} 生きている

b. この魚は {?まだ/もう} 死んでいる

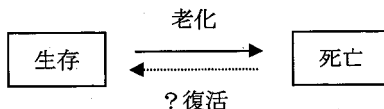


図1. 不可逆的な事態

これに対して、周期的に繰返される事態は未然相や已然相として指定されておらず、「元気だ」や「病気だ」のような概念はどちらの局面としても解釈可能である。「もう元気だ」は回復という場面を喚起し、以前は病気だったが今は元気だと解釈される。また、「まだ元気だ」という場合は衰弱という事象を喚起し、将来は体が衰えることもあるが今は大丈夫だと解釈される。

- (27) a. 父さんはもう元気だ → 已然相 (回復 (父さん))  
 b. 爺さんはまだ元気だ → 未然相 (衰弱 (爺さん))

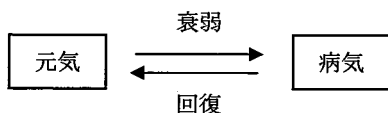


図2. 可逆的な事態

最後に、特質形容詞の場合を考えてみよう。特質形容詞は「賢い」や「優しい」など人間の能力や性格などを表わす形容詞であり<sup>34)</sup>、未然相、已然相のどちらの解釈も不自然である。これは人間の能力や性格といった属性は生得的に備わったものとして変化しないため、適切な変化の文脈が喚起されないためと説明できる<sup>35)</sup>。

- (28) a. ?あの人はもう {利口だ、親切だ、…}  
 b. ?あの人はまだ {利口だ、親切だ、…}

このように、一般に、局面副詞を付加することによって形容詞は未然相や已然相として解釈されるが、その際、局面解釈は適切な事象フレーム (例. 回復や衰弱等) の喚起を条件としていることがわかる。

## 5.2 時間の知覚——事態から時間へ

人間は時間の経過そのものを知覚するのではなく、ある外界の変化を通して時間の経過を相関的に知覚する。また、われわれは実際の出来事を経験するまでもなく、現在という時点に残る痕跡によって、そこにどれくらいの時間が経過したかを知覚することができる。つまり、時間は環境のなかに“痕跡化”しているともいえる。

例えば、「古い／新しい」という形容詞は基本的に時間的な経過を表わすが、その概念化の過程を見ると、時間は事態の局面の知覚と相関的に理解されていることに気づく<sup>36)</sup>。「このカバンは古い／新しい」という場合、われわれは実際の時間的な経過を直接に経験するまでもなく、カバンの状態からそれが時代を経たものかどうかを知ることができる。

(29) a. この {カバン、くつ、家、…} は古い

b. この {カバン、くつ、家、…} は新しい

こういった時間と事態の相関は次のように図式化される。

以下の図式は時間の経過はつねに事態の推移とともにあり、ひとは直接に時間そのものを知覚せずとも、眼前にある事物の状態によって時間の変化を間接的に理解することができることを示す。

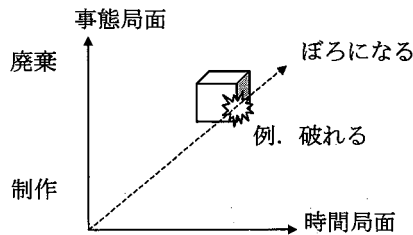


図3. 時間と事態の相関関係

これらの時間と事態の相関モデルにより、等価な状況に対して次のような二つの表現が可能であることが説明される<sup>37)</sup>。(30a) は眼前の状態＝痕跡を言語化した場合の表現であり、(30b) はそういった痕跡から得られた時間の経過を焦点化した表現である。ただし、このどちらに焦点をあてた場合も、われわれは両方の局面を同時に知覚していることが多い。

(30) a. このカバンは {ぼろぼろだ、びかびかだ} : 事態局面を焦点化

b. このカバンは {古い、新しい} : 時間局面を焦点化

### 5.3 局面解釈と物語の理解

最後に、こういった時間と事態の相関を理解することの重要性を物語の解釈と

いう点から簡単に見てみよう。以下は宮沢賢治の童話「注文の多い料理店」の冒頭であるが、ここで「びかびかする鉄砲」という表現は単なる鉄砲の属性を述べているだけでなく、それによって二人の紳士は狩猟の経験が浅く、ほとんど初心者であることが含意されている。

- (31) ふたりの若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、びかびかする鉄砲をかついで、白くまのような犬を二匹つれて、だいぶ山奥の、かさかさしたとこを、こんなことをいいながら、あるいておりました。

ここで必要になるのは、鉄砲の状態から持ち主の経験年数という時間の局面を理解する局面解釈の能力である。「びかびかする鉄砲」はそれがほとんど使用されていないことを表わすものであり、こういった解釈は冒頭の「若い（紳士）」という表現とも呼応する。また、「紳士」という呼び方も狩猟という場面にそぐわない人間であることを仄めかしている。

このように局面という概念を利用することで、われわれは個々の事物や人間の状態をより大きな変化の文脈のなかで理解することができる。その際、局面という概念を成立させているのは痕跡や徴候といった客観的な情報であり、詩や物語などいわば主観の産物とされてきた芸術作品においてもその根底ではこういった環境の意味論が保持されていることは注目に値する。

## 6. おわりに

本稿は、生態心理学の観点に立ち、言語的なアスペクト現象の背後にある知覚の方略とそれを支える環境の意味論について考察した。まず、アスペクト現象を分析する道具立てとして局面という概念を提案し、ひとは状況を閉じられた完結的な状態としてでなく、未然相と已然相を基本にした事態の流れのなかに位置づけることを明らかにした。

また、そのような概念化は主観的に構成されるものでなく、環境の意味論（＝生態学的的事象）によって支えられたものであることを示した。今回は、知覚を可能にする環境の情報として痕跡的信息と徴候的信息という二つの事象のアフォードダンスを提案し、われわれがそのような情報をもとに事態を適及的または予期的に解釈することを議論した。

ただし、言語の表わす概念は環境の情報のみには帰属されるのではなく、エージェントのプランや感情的な状態に帰属される部分が大い。今後は、人間が言語によってどのような環境の情報を利用するかに注意を向けるだけでなく、主体の主観的な状態により環境への注意の配分がいかにか影響を受けるかという問題にも考察を進めていこうと思う。

### 註

- 1) 本稿で形容詞という場合、意味的な概念として広く属性を表わすものとする。したがって、イ形容詞やナ形容詞のような形態的な相違は考慮せず、基本的に意味論的・語用論的な観点から形容詞のAspect現象を考察する。
- 2) Croft, William. *Syntactic Categories and Grammatical Relations*. Chicago: University of Chicago Press, 1986, p. 55.  
類型論的な観点から品詞論を展開したもので、形容詞は典型的に属性 (property) を表わすものとされている。
- 3) Comrie, Bernard. *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press, 1976, p. 48. (バーナード・コムリー『Aspect』、山田小枝 (訳)、むぎ書房、1988、p. 78.)  
局面という概念は前掲書によって導入されたが、残念ながら Comrie は局面の概念を積極的に利用してAspect現象を分析していない。
- 4) 影山太郎『動詞意味論』くろしお出版、1996。  
事象構造に関する文献は多いが、日本語の動詞に関するものではこの本が最も広範な現象を論じているものであろう。
- 5) 日本語動詞の語彙的なAspect現象を最初に扱った論考として、金田一春彦「国語動詞の一分類」金田一春彦 (編)『日本語動詞のAspect』むぎ書房、1976、pp. 1-26. が先駆的な研究として挙げられる。
- 6) 森山卓郎『日本語動詞述語文の研究』明治書院、1984、p. 150。  
森山は日本語動詞のさまざまな現象に対して新たな分析方法を提案しているが、Aspectに関する時定項分析もそのひとつである。
- 7) 初山洋介「人間」の捉え方と言語表現』『認知言語学会論文集』No. 3、2003、pp. 330-333. 初山によると、日本語や英語では「人間の成長は植物の生長である」とするメタファーが定着しており、「あいつは青い」という表現もひとの精神的な成長を植物の一年間の生長に喩えた表現とみなすことができる。
- 8) スクリプトという概念を文章理解の枠組みとして最初に提案したのもとして、



- Schank, Roger C, and Abelson, Robert P. *Script, Plans, Goals and Understanding*. Hillsdale: LEA Publishers, 1977. があり有名である。
- 9) フレームという概念に基づく言語分析の有効性については以下の文献を参照。Fillmore, Charles. J. *Frame Semantics*, In Linguistics Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm*, Seoul: Hanshin, 1982, pp. 111-137.
- 10) 言語の身体性に関する議論は Lakoff, George. *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press, 1987. (ジョージ・レイコフ『認知意味論』、池上嘉彦・河上誓作 (他訳)、紀伊国屋書店、1993) を参照。
- 11) 生態心理学の基本的な文献としては Gibson, James. J. *The Ecological Approach to Visual Perception*. Boston: Houghton. 1979. (ジェームズ・ギブソン『生態学的心理学』、古崎敬 (他訳)、サイエンス社、1985) を参照。
- 12) 生態心理学を言語研究に適用した最初の集大成としては、本多啓『アフォーダンスの認知意味論』東京大学出版会、2005. がある。本稿の分析もこの書から大きな影響を受けている。
- 13) Reed, Edward. S. *Encountering the World*. Oxford: Oxford University Press, 1996. (エドワード・リード『アフォーダンスの心理学』、細田直哉 (訳)、新曜社、2000, p. 324.) 生態心理学は知覚の理論として提案されたものであるが、その考え方が言語やコミュニケーションの分析にも適用可能であることが示唆されている。
- 14) アフォーダンスの概念を一般向けにもわかりやすく解説したものとして佐々木正人『アフォーダンス』岩波書店、1994. が参考になる。
- 15) Zerubavel, Eviatar. *Hidden Rhythms*. Chicago: University of Chicago Press, 1981. (エビエタ・ゼルバベル『かくれたリズム』木田橋美和子 (訳)、サイマル出版、1984) 環境のなかに事象や時間に関する情報が埋め込まれているという見解は、社会学や人類学のなかにも認めてられており、ゼルバベルは「時計仕掛けの環境」として通文化的に時間を構造化する環境を提案している。  
「時計仕掛けの環境」(Zerubavel 1981)
- a. ことがどういう順序で起こるかという時間的順序関係 (order)
  - b. 事柄が続く時間的長さ (duration)
  - c. ことがいつ起こるかという時間的位置 (時期 proper time)
  - d. それがどのような間隔で起こるか (frequency)
- 16) 工藤真由美『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系』ひつじ書房、2004, p. 48. 本稿で見る予期や回顧といった概念が提案されている。本稿はさらにそういった主観的判断を可能にする世界の状態として徴候と痕跡という概念を提示し、これを形容詞のアスペクト解釈に結び付ける。

- 17) 金田一春彦「日本語動詞のテンスとアスペクト」金田一春彦(編)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房、1976、pp. 1-26. 金水敏「時の表現」金水敏(他著)『時・否定と取り立て』岩波書店、2000、pp. 1-92.  
近局面という概念と等価な概念として金田一は「将前相」、金水は「未発相」という概念を用いている。ここでは出来事が切迫していない状態を表わす遠局面という概念と対照させるため、近局面という用語を用いる。
- 18) 工藤真由美『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系』ひつじ書房、2004、pp. 261-300. 共通語の「ている」の表わす意味は、西日本方言では進行形の「よる」と完了形の「とる」というかたちで現れる。
- 19) 寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版、1987、p. 237.  
「そうだ」や「かもしれない」以外にも多くのモダリティ表現の具体的な分析が行なわれている。ちなみに寺村もアスペクトやモダリティの分析のなかで、すでに痕跡や徴候といった概念を用いていることを書き添えておく。
- 20) 仲本康一郎、小谷克則、井佐原均「予期的認知と形容表現」『認知言語学会論文集』No. 4、2004、pp. 34-44.  
予期の表現に関する部分的な考察を行ったもの。
- 21) 国広哲弥「認知と言語表現」『言語研究』No. 88、1985、pp. 1-19.  
痕跡的認知という概念を最初に提案した論考である。
- 22) 痕跡の情報として利用される情報として、「きず、かけら、あざ、ひび、しみ、汚れ」などの表現が考えられる。これらの表現の分析は別項に譲る。
- 23) 事態の始局面は、「パンがほやほやだ」のようなかたち以外にも、「(できた) 一ばかりだ」「(でき) たてだ」のような動詞の派生形として表現されることもある。
- 24) 寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版、1987、p. 136.  
先にも述べたとおり、寺村は「ている」が結果の状態を表わすことを指摘するなかですでに痕跡という概念を用いている。
- 25) 工藤真由美『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系』ひつじ書房、2004、pp. 261-300. 西日本方言ならば「木が倒れとる」という形式で表わされる。先に見た「木が倒れよる」という表現とあわせると、西日本方言では痕跡と徴候とがちょうど相補的なかたちで存在することがわかる。
- 26) 寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版、1987、p. 148.  
寺村は「一されている」という形式は、「自然の力か、人の動作でも非意図的な動作による場合」に用いられると述べている。
- 27) 国広哲弥「認知と言語表現」『言語研究』No. 88、1985、pp. 1-19.
- 28) 城田俊『日本語形態論』ひつじ書房、1998、pp. 170-173.

城田は「かけた」の他に「たてだ」「ずめた」「どーしだ」「っきりだ」「ばなしだ」などの興味深い表現を挙げ、これらを段階相状詞と呼んで分析している。これらの表現はすべて事象の局面を表わすものであるが、今回は残念ながらこれらのすべてを取り上げることができなかった。今後の課題としたい。

- 29) 岸本秀樹『統語構造と文法関係』くろしお出版、2000、p. 117。  
「かけ」名詞構文に現れる動詞は非対格動詞であり、「働きかけの作業員」や「叫びかけのジョン」など非能格動詞は不自然であることが指摘されている。これを生態心理学の観点からとみると、非対格動詞が指示する事態は環境に何らかの結果=痕跡を残す事態であるためと説明できる。
- 30) その他にも対事象現象として、「行く」と「帰る」、「出る」と「入る」、「上がる」と「下りる」、「つける」と「はずす」などの組み合わせが考えられる。
- 31) Pustejovsky, James. *The Generative Lexicon*. Cambridge: The MIT Press, 1995, p. 111.  
解釈の強制は、述定や修飾の際に意味のミスマッチが存在した場合、述べられる要素の意味のタイプを変換する操作と定義される。ここではこの現象を広く意味的な変更を行なう操作一般とみなし、局面副詞による形容詞の意味の付加もその一つの現象と考える。
- 32) 「もう・まだ」に関するより詳細な分析は、池田英喜「「もう」と「まだ」」、『阪大日本語研究』No. 11、1999、pp. 19-35。が詳しい。ここでは池田のいう「状態の移行」という概念を事象フレームというかたちで表現することにする。
- 33) 同様に「幼い、若い、なまだ、うぶだ、無知だ」などの表現は未然相として解釈される傾向があり、「もう」による已然相の解釈は不自然である。  
a. あの子はまだ {幼い・若い・なまだ・うぶだ・無知だ}  
b. ?あの子はもう {幼い・若い・なまだ・うぶだ・無知だ}
- 34) (特) 質形容詞という概念については、荒正子「形容詞の意味的なタイプ」『ことばの科学 3』むぎ書房、1989、pp. 147-162。及び樋口文彦「形容詞の分類」『ことばの科学 7』むぎ書房、1996、pp. 39-60。を参照。また、同様の概念は、Krifka, Manfred. *et al.* Genericity, In G. N. Carlson & F. J. Pelletier (ed.) *The Generic Book*. Chicago: The University of Chicago Press, 1995, pp. 1-124。でも提案されている。
- 35) ただし、「あの子はまだ {利口な、親切的な、…} ほうだ」のように、他者との比較という局面で解釈される場合はこういった表現も可能である。
- 36) 仲本康一郎「時間認知を反映する形容詞」『関西言語学会プロシーディング』No. 20、2000、pp. 109-119。(『言語科学論集』京都大学、No. 5、2000、pp. 89-99に再録。)

「古い」や「新しい」以外に、時間形容詞を広く扱った論考。

37) 「新しい」は時間の推移という側面を背景化させ、事態の推移のみを焦点化する用法を持っている。例えば、「新しい {紙コップ、割りばし、…}」という場合、紙コップや割りばしで使用されたかどうかという点だけが問題にされている。

〈キーワード〉局面解釈、事象フレーム、徴候的信息、痕跡的信息、解釈の強制

## Phase Interpretation and Aspectual Phenomena

—An ecological psychological perspective—

Koichiro NAKAMOTO

Previous linguistic studies have generally conceived adjective to denote the “property” or “state” of an entity. However, this concept does not take the interpretation of Japanese adjectives such as *huru-i* (‘old’) and *atarashi-i* (‘new’) into sufficient consideration; the meanings of these words are best characterized in terms of “phase”. In this study, we investigate the nature of phase interpretation of adjectives and characterize it from ecological psychological perspective. We propose the notion of event frame to describe various types of phase interpretation of adjectives and some related temporal adverbs such as *moo* (‘already’) and *mada* (‘still’).